

図書館だより

BUNKA GAKUEN LIBRARY

文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院・文化外国語専門学校
東京都渋谷区代々木3-22-1 TEL.03-3299-2395

No.179

文化学園図書館

2025年9月25日発行

私を創った本 教員編 第3回

今号は「私を創った本 教員編」第3回として、留学生に日本語や通訳・翻訳を教える文化外国語専門学校の先生に本を選んでいただきました。

「私を創った本」とは…？

ファッション界をはじめ、各界で活躍されている方から、考え方や人生に大きな影響を与えた本を教えてください、図書館内で展示する企画です。その本を読むことで、学生の皆さん自身の未来を創るためのインスピレーションや気づきになってもらえればという思いで行っています。

これまでの「私を創った本」

第1回	ISSEY MIYAKE 宮前義之さん(文化服装学院卒業生)
第2回	アーティスト とんだ林蘭さん(文化服装学院卒業生)
第3回	TSIホールディングス取締役社長 下地毅さん(文化服装学院卒業生)
第4回	デザイナー／アーティスト 篠原ともえさん (文化女子大学(現・文化学園大学)短期大学部卒業生)
第5回	写真家 川谷光平さん(文化服装学院卒業生)
第6回	BEAMS PLUS チーフバイヤー 金子茂さん(文化服装学院卒業生)

2024年度、第4回はデザイナー／アーティストの篠原ともえさんに、第5回は写真家の川谷光平さんに選んでいただきました。2025年度の第6回は、BEAMS PLUS チーフバイヤーの金子茂さんに選んでいただき、BEAMSのイベントも図書館で実施しました。

いずれの方も、ご自身でお持ちの書籍や作品などを展示のためにご提供いただき、学生の皆さんにも大変好評でした。



展示風景(第5回)



展示風景(第6回)

私の大学の恩師、大坪一夫先生が著者の一人だったこともあって、大学の研究室にあった『日本語音声学』を手にしました。その時は単位を取るために目を通した程度でした。文化外国語専門学校で日本語教師になって10年目頃だったでしょうか、先輩の先生二人と日本語の音声教材を開発することになり改めてこの本に目を通しました。すると、音声教材を作るために必要なことが音声学の専門家でなくてもわかる言葉で具体的な例を添えて書き記されていて、ここを教材に生かそうと頷きながら読みました。この本の価値に気付けるようになるのに私には10年の経験が必要だったようです。その時に貼った付箋がまだ残っていて、今回そこに久々に目を通してみました。すると、初見のように感じられることがいくつもあり、しっかりしろと自分に言い聞かせると共に、良い本は何度読んでも得るものがあるものなのだと亡くなった恩師に感謝いたしました。

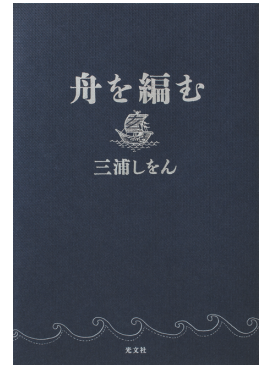
『舟を編む』が本屋大賞に選ばれた時、言葉にまつわる話であれば日本語教師の自分も読んでおかなければ恥ずかしい、そんな気持ちで読み始めました。読み進めるにつれて物語の世界観に引き込まれていきました。登場人物が言葉ひとつひとつを大切に辞書作りと向き合おうとする姿に、言葉を教えるということとの共通点や言葉が持つ不思議な力を感じることができました。「たくさんの言葉を、可能なかぎり正確に集めることは、歪みの少ない鏡を手に入れることだ。歪みが少なければ少ないほど、そこに心を映して相手に差し出したとき、気持ちや考えが深くはっきりと伝わる。一緒に鏡を覗きこんで笑ったり泣いたり怒ったりできる」という本の一節は印象的でした。私も言葉を大切に日本語を教え、私が教えた言葉で学生とわかり合い、笑ったり泣いたりできたらいいなと思います。

30歳になったころテレビで初めて小栗上野介を知って『罪なくして斬らる 小栗上野介』を読みました。小栗は1860年（万延元年）に日米修好通商条約批准の遣米使節としてアメリカに渡ったことをきっかけに、日本の近代化の必要性を実感します。帰国後は、勘定奉行や軍艦奉行などを歴任し、日本の将来のために周りに反対されながらも横須賀に造船所を建設します。この本を読んで、よりよい社会のために信念を貫こうとする小栗の姿に感銘を受け憧れにも似た気持ちを持つようになり、その後何冊も小栗の本を読むことになります。2027年のNHKの大河ドラマで小栗上野介が主人公として描かれることが決まりました。そうなればこの場で小栗の本を推さないわけにはいき

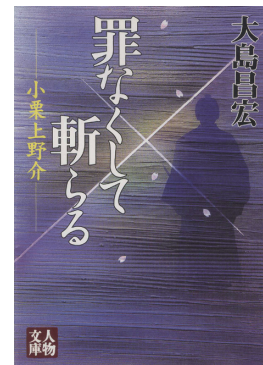
ません。他人が知らない誰かを推すことの喜びを知ることができたのもこの本のおかげです。この機会にぜひ皆さんにも小栗に興味を持っていただければと思います。



天沼寧, 大坪一夫, 水谷修
『日本語音声学』くろしお出版
(1978)〈811.1/N〉



三浦しをん『舟を編む』／光文社
(2011)〈913.6/M〉



大島昌宏『罪なくして斬らる 小栗上野介』(人物文庫)
学陽書房(1998)〈文庫//O〉

にしむら まなぶ
西村 学

文化外国語専門学校
副校長・教務部長

東北大学文学部日本語学科日本語教育学専攻卒業。2017年4月より現職。

【出版・研究等】

「日本語教師の国家資格化は文化外国語専門学校に何をもたらすかー日本語科での取り組みを中心にー」『早稲田日本語教育学』第37号(2024)

「『代わって』と『代わる』の指導上の留意点」『文化外国語専門学校紀要』第29号(2017)

文化外国語専門学校日本語科著作・編集『文化初級日本語I・II 改訂版 教師用指導例集』凡人社(2013)

第22、23期文化審議会国語分科会委員(2022～2023)



子どもの頃から本だけはたくさんある家で育ちました。母が自宅の軒下を開放して家庭文庫を開いていたため、近所の子どもたちと一緒に絵本や童話など様々な本に触れることができました。まずはその中の1冊から。

むくはとじゅう
椋鳩十『マヤの一生』

この本は『大造じいさんとガン』をはじめとして数々の動物児童文学を生み出した椋鳩十が、戦前から戦中にかけて家族の一員として飼っていた犬のマヤに捧げた物語で、作者が戦後20年以上温めて書き上げた作品です。私はこの本に子どもの時出会いましたが、その時の衝撃が今も忘れられません。大人になってからも時折読み返し、子どもが生まれてからは子どもに読み聞かせました。

この本には動物の賢さ、生き物の尊さと共生、戦争の愚かさ、人間の危うさなど命や戦争と平和について考える上で大切なことがぎゅっと詰まっていて、一度読めば動物たちが「人間と同じように、戦争のもたらす、暗く悲しい運命からののがれることができ」なかったことを「ほんとに胸が、キリキリと痛む」と回想する作者の胸の痛みを、自分のことのように感じるでしょう。戦争を経験した世代の話を直接聞くことが難しくなってきた現代においても、この本を読むことで「キリキリと痛む」経験を共有し、戦争の愚かさや平和を守ることの難しさ、日常が続くことのありがたさを感じることができるのではないのでしょうか。

私は広島出身で親戚には原爆で命を落とした者もいます。そのためか恒久平和への希求が自分の中に根付いており、この本を読むたびにその思いが新たに蘇ります。現在私は「ことばの教育は平和な世の中をつくることに貢献できる」と信じ、日本語教師の仕事が続けています。この本は、私の平和への誓いの原点でもあるのです。

ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

この本は、イギリスでアイルランド人と結婚、保育士でありライターでもある作者が、息子が通う「元底辺中学校」での出来事を中心に、彼の成長を描いたノンフィクション作品です。

本書には作者の息子が「ぶち当たる」様々なトラブルや人間関係を通して、問い、考え、成長する姿が描かれています。読者である私たちも読み進めるうちに、日常の中にある多様性、アイデンティティ、格差、差別、ジェンダー問題、貧困、政治的対立など、現代社会が抱える様々な課題に向き合い、共に考え、悩むことになります。

作品の中には「多様性は、うんざりするほど大変だし、

めんどくさいけど、無知を減らすからいい」や、エンパシーとは「誰かの靴を履いてみること」など、多文化共生社会を生きる上でヒントになるメッセージが満載です。ラストは、息子が「ブルー」という色を脱ぎ捨て、新たな色を見つけ出します。その物事にとらわれない軽やかな感性と、誰かの靴を履こうとして対話をあきらめないロクな姿に、ジーンとしたり、痛快な気持ちになったりと心揺さぶられる作品です。私たち大人も彼らを見習って、しなやかに変化していきたいものです。

このように「平和」「多様性」など一見難しいテーマであっても、その本質をわかりやすく伝え、自分のこととして考えさせてくれる作品が私は好きなようです。この原稿を書いているうちに、それは私が授業をする際、心がけている点と重なることに気づきました。こうして本との出会いによって「私」は創られてゆくんですね。



椋鳩十『マヤの一生』
大日本図書(1970)〈913.8/M〉



ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』(新潮社刊)
(2019)〈376.333/B〉

しらいわ まな
白岩 麻奈

文化外国語専門学校 専任教授
日本語科研究室長
登録日本語教員

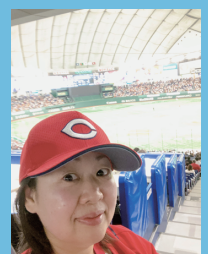
東京女子大学言語文化学科卒業後、本校に勤務し今年が勤続30年の節目。今年子どもたちの巣立ちと共に大学院に通い始め、仕事と研究との両立に奮闘中。

【出版・研究等】

文化外国語専門学校日本語科著作・編集『文化初級日本語I・IIテキスト改訂版』 凡人社(2013)

白岩麻奈・平川奈津子・浅野目志乃「JF Can-doを用いた『文化初級日本語I・IIテキスト改訂版』の分析と課題」『文化外国語専門学校紀要』第33号(2021)

白岩麻奈「交流活動の意義を考える:留学生と小学生との交流活動の報告」『文化外国語専門学校紀要』第25号(2012)など



ChatGPTなどAIの性能が日々向上する中、ネットでの機械翻訳やスマートフォンの音声通訳アプリも一般的なものになりました。将来、翻訳者や通訳者の仕事はなくなり、外国語を学ぶ必要もなくなるという意見さえあります。本当にそんな時代が来るのでしょうか。

社会人になりたての頃、ロシア語通訳者・米原万里さんの『不実な美女か貞淑な醜女か』を読んで通訳者に憧れました。当時は出版社で働いており、趣味で中国語を学んでいたもので、言語には興味がありました。しかもこの本には、通訳者という仕事の面白さと大変さ、そして異なる言語間のコミュニケーションにまつわる悲喜劇が満載でした。その言語を駆使して世界中を飛び回る米原さんの姿に、「かっこいいなあ」と魅了されてしまったのです。それで会社を辞め、留学と通訳学校での訓練を経て、中国語の通訳者になりました。

仕事から、AIの登場には心穏やかではられません。それでも私は、外国語を学ぶ意義は今後も変わらないと考えています。それは言語がこの世界を理解するための方法であり、しかも言語が異なれば世界の理解のしかたも異なるからです。例えば日本語では「蝶」と「蛾」を区別しますが、フランス語ではどちらも“papillon”です。また日本語では「しゃっくり」と「げっぷ」に分けて捉えている生理現象を、中国語ではどちらも“打嗝”と（少なくとも日常生活のレベルでは）表現します。

私たちはそれぞれの母語による捉え方で世界を理解しています。ですから外国語を学んでいると、自分の母語では表現できないような新鮮な概念に出会うことがあります。外国語の学習とは、母語とは違う世界の捉え方、それまでは気づかなかった発想を見つける営みなのです。外国語の視点を通して私たちは、より複眼的に物事を捉えられるようになります。

そう考えると、旧約聖書に出てくる「バベルの塔」の神話は実に意味深長です。人間が天にも届く塔を建てようとして神の怒りに触れ、言葉がバラバラになったという神話。そうなったからこそ異なる文化や視点が生まれ、人類はそれぞれの知識を共有し合うことで豊かな文明を築くことが

できたのではないのでしょうか。「知」はお互いの差異に、つまり人々の多様性にこそ宿っていたというわけです。

もし外国語の学習や通訳・翻訳をすべてAIに任せてしまい、世界中の人々が自分の母語の内側だけで思考するようになれば、新たな視点で世界を見つめる機会が失われ、想像力や創造力が衰えていくかもしれません。ネット空間の情報量やAIの計算能力に頼るだけではなく、私たち自身のものの見方や考え方、そして感受性も拡張し続けていく必要があります。

ですからみなさん、これからも胸を張って外国語を学び続けましょう。それはクリエイティビティの源泉であり、この世界をより深く楽しもうとする営みなのです。みなさんの人生がさらに豊かで楽しいものになることうけあいです。



米原万里
『不実な美女か 貞淑な醜女か』（新潮文庫刊）
（1998）〈801.7/Y〉

とくひさ けい
徳久 圭

文化外国語専門学校 専任講師
武蔵野美術大学造形学部彫刻学科
卒業。出版社等に勤務後、企業内
通訳者、フリーランスの通訳者等を
経て、2018年より現職。

【出版・研究等】

徳久圭、郭受恵、唐澤麻里、桑原
里奈、アルバーディング聖子「実践報告：日本語通訳ビジネス
科における日本語劇への取り組み」『文化外国語専門学校
紀要』第37号（2025）



絵：ソノソムヌックティタバーさん

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください

[TEL] 03-3299-2395 [URL] <https://lib.bunka.ac.jp>

Xとfacebookにて図書館の情報を発信しています

[X] <https://x.com/bunkalib> [facebook] <https://www.facebook.com/lib.bunka>



文化学園は、2023年に創立100周年を迎えました。
記念ロゴマークは、本学園の学生がデザインしました。